

---

# ふあいなるクエスト！

高嶋ナカノ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ふあいなるクエスト！

### 【Zコード】

Z3456Y

### 【作者名】

高嶋ナカノ

### 【あらすじ】

ある朝、ミナミンの枕元にいきなり現れた、女神アルテシア。彼女曰く、ミナミンこそが魔王ピイチヤンを倒す勇者だというのである！！しかし勇者ミナミンはぐうたら無職、一ートでダメ人間、ヤル氣とはまるつきし無縁の世界の男なのであつた！！女神アルテシアは勇者ミナミンのケツを叩いて魔王ピイチヤンを倒し、無事に世界の平和を取り戻せるのか的、ゆるゆる展開のダメダメギャグファンタジー！！（ 1 この話はほぼ全編、ほとんどが台詞文章です。ブログやチャットログ感覚で書かれていますので、横

書き読みを推奨します。顔文字などもありますので、苦手な方は回避をお願いいたします）（2 たまに挿絵があります。挿絵表示を〇にしてもおいていただけすると嬉しいです）

女神「起きたら、..... 頼む//ナ//ハ//よ.....」

勇者「ンガ～スピヨピヨピヨ……ムニヤムニヤ……もう食べられな  
あい……。」

女神「お約束チックな寝言を言つていないので、目を覚ますのです……」

勇者「こりあ。逃げちゃダメだぞ。『一ノモ、ニキノモ、マニノモもみんな俺のものだ。満腹だにせば、みんな食べちゃう〜グエッヘッヘッ…。」

女神「（ 口 111 ） 食べるつての方ツ？ しかもお腹いつぱいとかいつてるし！！ 連載開始早々ど淫夢ツ？ええい、起きなさいといふにー！！！」

勇者＝＝ナ＝＝ンは床に頭をぶつけて、10のダメージを受けた！

勇者「（#。。。）ノ、ゴルア！！誰じやい、俺様のことを派手に暗殺しようとかねフードキ者わーーー！」

女神「派手に暗殺つて言葉として変でしょ！それから私は暗殺目的でやつってきたわけではありません…」

勇者「じゃあ強盗？お金なんかないよ。  
（キラッ）  
だつて俺様無職だモンッ

女神「（　　？）　強盗ではありません！それから威張れる」と  
じゃないでしょ？。」

勇者「いい——いい（：）いい——いいって」とは、よ……夜這い？ 俺様もしかして貞操の危機真っ只中ッ？」

女神「（#。。。）ノ もつと違いますッ！－私の名はアルテシア。私は貴方に勇者として、世界を平和に導くために、私と共に魔王と戦つてほしいのです！－」

勇者「なんだ。宗教の勧誘だつたのか。すいません。俺様の宗教は巨人なんでえ、新聞は読売とることに決定してゐんで結構ですう。」

女神「宗教でもないし、新聞の勧誘でもないし、ましてや強盗でも夜這いでもありませんッ！！」

女神「（…）いやだから寝ないでくださいってばッ！」

勇者「（ガバッと起き上がりつて）つかね！！非常識！！夜這いでも強盗でも宗教勧誘でも巨人ファンでもない分際で、こんな夜中に勝手にひとんちあがりこんで、勇者になれとか魔王を倒せとか、とつてもすつごく非常識！！そんなわけで、俺様寝るから！！おやすみグッナイ！！ばたんきゅう！」

女神「非常識なのは謝ります！けれど時間がないので。魔王ピイチャン悪の手は、すぐそこまで……って全然聞いてないし……。だめだわ……完全に爆睡してる……。明日の朝、出直してこよひ……。めぞめぞ。」

こうして勇者ミナミンは、女神アルテシアの誘いを、初回から見事にナイガシロにしたのであった。

がんばれ、女神アルテシア！！  
負けるな、女神アルテシア！！

世界の未来は、勇者ミナミンではなく、君の手にかかるている……。

続く。

2話「勇者、田代覚め。」

勇者「ナミンは自分の部屋の温かいベッドの中で、うつむかうと田を開き、窓の外の空を見あげた。

レースのカーテンごしから差し込む光は明るく、空は晴れ渡っている。

勇者「おお、なんていい天氣なんだ。こんな日はゆっくり昼寝でもするに限るな！ってなわけで、おやすみなさい。ぐぐ。」

ドンガラガッシュアンプルボニョウメッシュアーン。  
ヽ( # 。 。 )ノ ( )、 ( )ノ

女神「あなたッ！…どつつんだけ寝る氣なんですかッ！」

勇者「誰じやい、俺様の安眠を邪魔する奴わ！…」

女神「ヽ( \* 、 \* )ノ」ミ もう完全に昼なんですよーおまけにこれから昼寝だなんて…！…いつまで待たせる氣なの……！」

勇者「俺様、朝寝して・夜寝するまで昼寝して・時々起きて居眠りをする算段…！」

女神「いつを永眠してしまーなさい……」

勇者「イエッス　アイアイイサー！　ぐ～。」

“せせメシヤ”じめぐれボーラーン――

勇者「（ 、 、 ）」  
なにしやがる……暴力反対……」

女神「(メ　皿)＝3　いいから起きなさいとこのひのこ」

勇者「永眠しきだとか起きのだとか、どつちだよーーつーか、ア  
ンタ誰?」

女神「だからーー！女神アルテシアですッーー！昨晩も名乗つたでしょ  
つ！」

勇者「お前、何でそんないかにもファンタジーです」みたいなズルズル長い衣装着てんの？髪もやら長いし。歩くの邪魔じゃね？」

女神「だから私は女神なんですってば！天界の住民だから、服も人間界のデザインとは違うものなんです！ほら、私の背中に翼があるでしょ！」（ぐるぐると後ろを向く）

勇者「あ・ホントだ。でも、そんなちつこ翼つこいても、意味ねえじやん。」

女神「空を飛んだりする時には、大きく広げることが出来るのですよ。」

勇者「収納可能なんだ。へえ、便利だな。……で？その女神様が、人間界・式本国・北魁道県・薩幌市在住の20歳無職、好きなものの巨人、集めてるものエロ本という俺様に、一体何の用事だ？」

女神「それも昨日から言つてるでしょっ！魔界の王ピイチヤンが世界を闇に沈めよう企んでいるとの予言が出たのです。ですから勇者ミナミン、貴方の力を借りに来たんですよ！」

勇者「（ピ・ポ・パ）あ～もしも～し。警察つスか～？俺様、ごく普通の平凡な無職の一般市民なんスけど～。なんか頭のおかしい痴女が、俺様の芳しき汚部屋（長年開けてなかつた押入れのすみっこみたいな臭いが充満）に押し掛けてきてんスよね～！」

女神アルテシアは勇者ミナミンの携帯電話をひつたくる。

女神「（笑顔で）あ・警察の方ですか～？すみませ～ん。今の間違い電話ですう～。頭がおかしい変態は今の男性のほうなので、どうぞお気になさ～りや～う。ピッ。」（切）

勇者「（ 、口、 ） 誰が頭がおかしい変態じゃっーー！」

女神「（メ　皿）＝3 そつちいじや、誰が頭のおかしい痴女ですか～！～！」

勇者「（ 、 、 ） 朝つぱらからやつてきて、初対面のパンピーを勇者よばわりする女は変態でえつす！～（断言）」

女神「……（トトト）…… うひひ…… こんなアホに、変態呼ばわりされるだなんて……。」

勇者「つづーかね！魔王倒せとか無理！俺様、自慢じやないが、金も根性も実力もないざんす！（どーんと胸をはる）」

女神「本当に自慢にならないわね……。けれど、勇者ミナミン、あなたしか魔王を倒すことはできないのです。」

勇者「（＝＝＝）何故にツ？」

女神「あなたの家は代々勇者の家系でしょう。」

勇者「あ、なんかそ～らし～ね～。うちの母ちゃんが言ってたわ、うちのハゲオヤジは昔、聖剣エクスカリバーを使える勇者だったとか何とか。」

女神「ええ、この家には代々『聖剣エクスカリバー』が伝わっています。そして、ミナミン、あなたは勇者家直系、唯一の男子。聖剣エクスカリバーは直系男子が20歳になると、自動的にその人物に継承され、他の人物は例え先代の勇者であろうとも、一切その聖なる力を發揮することが出来なくなってしまうのです。そして、聖剣エクスカリバーでなければ、闇の魔王を倒すことはできません。」

「

勇者「うえ～。何か仏間にある床の間に、やたらゴツくて派手な剣が偉そうに飾つてあるな～って、前から不思議に思つてはいたけれどもさ～。アレ、そんなメンドクサイもんだったのかよ～。」

「

女神「とまあえず私は『聖剣エクスカリバー』に用事があるのだけ

れど……。」

勇者「（……）「やんですか？」

女神「エクスカリバーは今、ビニにあるのかしら？（部屋の中をキヨロキヨロ）」

勇者「（……。；。；。）え、……その件についてですがア～…諸事情とかがありまして～もう、この家にはないのでござりまする～。（遠い声）」

女神「（――。）ええつ？諸事情つて何ですかつ？ビリいうことつ？きちんと説明してくださいつ！」

2話目にして、伝説の聖剣をさつさと紛失したらしく勇者ミナミン。魔王ピイチャン打倒の道を阻む、急転直下の大事件がいきなり勃発ツ？

聖剣エクスカリバーの行方はいかにツ？

続くつ。

### 3話「聖剣エクスカリバーの行方。」

女神「（――。）聖剣エクスカリバーがここにはないって、一体どうじうことですか？あの聖剣は、あなたの家でもあるナ力ノ家に代々伝わっている家宝のはずですよっ！」

勇者「。+。：（\*・・・）シ…。+。いやまあ、そーなんですけども。色々あつてH、つこじつか行つちゃつたつてゆうかあ（）。」

女神「女子高生口調で言い訳してないで、ちゃんと答えてくださいっ！聖剣はどうなつたの？？」

勇者「（遠い目をしながら回想開始）そつ……あれは卑怯な罠だつたのだ……。」

女神「罠にハメられて、聖剣を奪われてしまつたつてことですか？？」

勇者「ハイ。その通りにござります。（何故かとても殊勝な態度）」

女神「何としても聖剣を取り戻さなければ、世界は魔王ピイチヤンの手に落ちてしまつ……！一体、どんな敵に奪われたのですか？」

勇者「え……あれはかれこれ1週間ほど前のこと……。近所に住んでる友達の、ハラと、ハルユキと、ゴンちゃんの3人で、雀荘に入りましたですな……。」

女神「…………今、皆まで言わずともオチ見えたんですが

…まさか賭け麻雀で負けて、スカンパンになり、借金代わりに聖剣エクスカリバーを渡したりとかしてないでしょ？ね…。」

勇者「ヽ(\*、\*、\*)ノ”ミ　違うんだ！あれば俺様、ハメられたんだ！！ゴンちゃんときたら、超大技・國士無双を出しやがったんですよ！！ありえん！！あれば詐欺だ！！間違いねえ！！確信をもつて断言するッ！！！」

女神「ヽ(#。。。)ノ　ガツ？(ノ、。。)ノ

勇者「。。。(P、q。)。・・　痛いッ！暴力反対！！」

女神「(、。。)　ハメられたかどーかは知つたこっちゃありますよ！つまり、聖剣エクスカリバーはゴンちゃんといつ方のおうちにあるのねッ？」

勇者「うこつこい。」

女神「一刻も早く取り戻さないと…もし聖剣が魔王の手に渡つてしまつたら、世界が終わつてしまつわ！行きますよ、勇者ミナミン！ゴンちゃんのうちへ…！」

勇者「え、。(不満げ)朝ごはん食べてからでいい？あと、俺様、うんこしたい。」

女神「え、(じやありません…つか、朝ごはんも何も、もう毎日ですッ！うんこしたら、今すぐ行きますよッ！」

勇者「へいへい。」

勇者を卑劣な罠（笑）に嵌め、聖剣を奪つたのは、「ゴンちゃんとい  
う男らしい！」

女神アルテシアと、勇者//ナミンは、無事聖剣を取り戻すことが出  
来るのであろうか？

続く。

#### 4話「親切ゴンちゃん。」

「ごひゃん宅に到着し、家の前に住む一人。

女神アルテシアは、おんぼろ木造建築2階建ての家屋を見上げた。

女神「ここですね…ゴンちゃんのおうちは。ここに聖剣エクスカリバーがあるのですね?」

勇者「た…たぶん…。（自信なさげ）」

女神「（　　？）　たぶんじゃありませんッ！聖剣を取り戻さない」と、魔王ピイチヤンを倒せないんですよ!」

勇者「賭け麻雀で負けたカタに聖剣取られちまつたからなア…。ゴンちゃん、タダで返してくれつかなあー。俺様、只今、一銭も持つてないぜよ。」

女神「とにかくゴンちゃんに会つてみまじょ。」へんこ～ちわ～

「！」

パタンヒドアが開く。

「ゴン」「誰じやい、」んな朝つぱらから玄関先でテカイ声を出すのわ

！～（　　）～～～

女神「すこません……もつ午後なんですけど…。しかも髪の毛にバ

「…チリ寝ぐせついてる…。つて、ちゅうと、勇者ニアミン！あなたの方達、みんなこんなだらしない生活習慣の人たちばかりなのつ

勇者「ウイ。おおむね夜行性の連中ばかりなのであつた。」

「…」「おう、なんだミナミンじゃねえか！…うしたい、何か用か？  
ところで誰なんだ、このイカれたズルズルのコスプレをした、長い  
髪のねえちゃんは。もしかして、デリバリー売春で3Pのお誘いッ  
？」

女神「……（トト）……」1話で登場した時、淫夢見て  
た勇者といい、この「ンちゃんといい、食う・寝る・ヤル。しか脳  
みそに入っていいのかしら…。類友……類友だわ……。（溜息）」

勇者「いやいや、『ンちゃんよ。残念ながら今田の俺様、3Pのお誘いではないのだ。こなにだ俺様、『ンちゃんに聖剣あげちゃつた

「うん、ああ、あの家宝だつたとかいう剣かー。」

女神「（）。）） そうです、それですつー今、ビームあるのですか？私達には、聖剣が必要なのですつ！」

「（母の顔をした顔をして頭を搔いたかく）ニヤ……それがよお……」

女神「（……。；。；。）まさか、もう悪の手先に獲られてしまつたとか、売つてしまつたとか？」

ゴン「いやいや、ちやんとうちにはあるぜ。まあ、確かにあれは俺が麻雀で勝つて賞品代わりにもらつたもんだけじや。けど元は友達のもんだし、いつか返して欲しいなんて話になるかと思って、手元に置いておいたんだ。つーか、俺が持つても使い道ねえし。」

女神「…………あ……ありがとうございますうううう！（感涙）さつき類友とか罵つて申し訳ありませんでしたっ！勇者ミナミン、あなたはいいお友達をお持ちなのねっ！！」

勇者「（ ） ゲンキンな女だな、オイ。」「

ゴン「それがなあ……礼を言つのは、まだ早いと思つぜ。まあ、百聞は一見にしかずだ。とりあえず、2人とも、立ち話も何だから、うちの中に入れよ。」「

勇者ミナミンの友達の割には、「ゴンちゃんは案外マトモな人（ちょっとお寝坊さんなのが玉に傷）」だつたようだ。  
聖剣エクスカリバーも、どうやら無事だつたらしい。  
だが、ゴンちゃんの煮え切らない様子からして、どうやら聖剣に何か異変がつ？  
どうした、聖剣！！  
どうなる、世界！！

まだまだ勇者ミナミンと、女神アルテシアの旅は始まつたばかりだ！！

続くつ。

## 5話「恐怖の漬物ババア。」

「ゴン」「とつあえず、2人とも、立ち話も何だから、つむの中に入れよ。」

勇者「（ ）――（ ）」「つい。おひじゅましきへつす。」

女神「聖剣エクスカリバーはちやんとあるのかしづか。（ビザビザ）

「

「ゴン」「おーい。ばあけやーん！」

ゴンちゃんが奥の台所に向かって叫ぶと、腰の曲がったしわくちゃの老婆がよたよたと出でてくる。

勇者「（ ）――（ ）」「ついす。ばーちゃん、お久しふりー！まだ死んでなかつたのか！」

老婆「かかかかかか。あたしゃまだまだ若いよ。たつたの92歳だ

よ。」

女神「（ \* ）――（ \* ）」「まあ、お元氣でいらっしゃいます！」

老婆「おんやまあ、よぐ見たら、おめえわざ、靈顯屋の//ナ//ハヘン//ハヘンでねが~。んまア立派になつ……てなこのへ。ちつとわ。」

勇者「（ ）――（ ? ）」「社交辞令べりりーサービスで言わんかい、ク

ソババア。」

老婆「隣の子は嫁さんかい。あらまア別嬪さんだとい。なんじやいなんじやい、つまこ」とやつおつてへーイヒヒヒヒ。」

女神「(\* \* \* ) いーえッ、決してツーーー断じて嫁などではいぢりこません。おばあれまツーーー！」

老婆「んだじも、ちよつとケツが少つたこんでねが? もつとこいへ、おなじのケツはボーンとしてねえと、元気な赤ちゃんは産めねえどー!」

女神「( = = ) ケ...ケツ? いえだから、私は嫁などでは...」

老婆「かかかかかか。あたしゃまだまだ若いよ。たつたの92歳だよー」

女神「.....」

ゴン「すまんな、ねえちゃん。つちのばあちゃん、耳が遠いんだ。ちよつぴり認知症も入つてゐし。」

老婆「ヽ( #、ヽ、ヽ) ツ 誰が耳が遠くて、認知症が入つてゐつてツ? あたしゃまだ、たつたの92歳だよーーー！」

勇者「うーん、相変わらず都合よくタチの悪いババアだ。じつこつババアに限つて長生きだけはするからな。」

女神「ババ.....いえ、おばあれまの件はおこりおくとして、ゴン様、

聖剣エクスカリバーはどこにあるのでしょうか?」

「ゴン「……いや、えーとな…台所にある」とこはあるんだけ?」。

ゴンちゃんは申し訳なさそうな顔をしながら、台所の隅を指差した。  
そこには、大きな瓶が置いてある。

勇者「何だ?」の大瓶?」

老婆「ああ、それはアタシが漬けているヌカミソ漬けの瓶さ。ヌカミソってのは、大変でなア。毎日こいつして搔き混ぜなきゃならんのじやよ~。」

ババアは瓶の蓋を開けると、隣に置いてあつた聖剣エクスカリバーでヌカミソをべつつけいやべつつけとかき混ぜ……

勇者「( 口 一一一) つて!…ババア  
と待つたアアアア!…!…!」

老婆「なんじやい、いきなり大声出して。( びっふ。ぐりぐりぐり。  
) 孫のゴンが持つて帰つてきたこの棒、ヌカミソ混ぜるのに丁度良い長さと幅でのう。お~ 今日も芳しい良い香りがするぞえ~。」

女神「~、~、(トト)~、~、あああああああ~。」

「ゴン「( ^ー^;) ばあちやん。悪いんだけどそれ、ヌカミソ混

ゼ器じやねんだとよ。元々ミナミンの持ち物で、返してやりたいんだ。まあちゃんとほまた、俺がちょうどいい長そのくらを買ってやるよ。100均で。」

老婆「ありやまあ、そうだつたのかい。どおりでちょっと重たいと思つておつたんじや。ほれ、持つてけ、ミナミンちゃん。」

勇者「（ 、口、 ）　臭ツ！－超ヌカミン臭ツツツツ－！」

聖剣工クスカリバーは無事だつた……が、別の意味ちつとも無事ではなかつた！

勇者御一行様はヌカミン臭くなつた聖剣工クスカリバーで、果たして魔王を倒すことが出来るのであるうかツ？

魔王もいい迷惑だ！！

続くつ。

## 6話「新たなる聖剣！（ビニール袋入り）」

勇者//ナミンと女神アルテシアは、聖剣エクスカリバーにござりついたヌカニソを落とすため、ゴンちゃん宅の風呂場を借りることとした。

女神「（アーラー）…………ヌカミソは落ちたけど、匂いが消えない……」

勇者「（くそくそくそ）わ～ホントだ～わ～じ～じや～ん！」

女神」（。。。）乙女の真似しながら、他人事のように言わないでくださいよーーもとはといえば、あなたが麻雀で負けて聖剣を「ゴンちゃんに獲られてしまつたから、こんなことになつてしまつたんですよーー」

女神「（・・・）えつ？ いきなり素直な態度？ いえ、一応又カミソの匂いが染み付いてしまった以外は聖剣は無事だつたんですし、そんなに落ち込むことは……」

勇者「チキシヨウ、あそこで俺様があの牌を捨てずにはいられ、ゴンちゃんに勝てていたものを…悔やんでも悔やみきれぬ…」  
と次こそは勝あつ！（決意）

女神「（ - - ; ）……反省つて、麻雀に負けたことに対する反

省の方ですか……。てこつか、全く反省しませんね、ミナミノヘ……。

勇者「で・わ～あ。これからビースンの～？ まさかその聖剣持ち歩けとか言わないよネ？」

女神「（・・・#） 持ち歩かないで、ギリヤツテ魔王ペイチヤンを倒す氣なんですか？！」

勇者「いやだつてその聖剣、持ち歩いたが最後、別の意味でこの街の勇者になつちまつぞ！！」

女神「・・・（トト）・・・ そつなんですよねえ。問題はそこなんです。こんな又カミン聖剣では、魔王に辿り着く前に、世間の笑いものになつてしまつわ…。」

勇者「（・・・・・） そつだつ！！俺様、いじこと思いついた！～（勇者ミナミンの頭上に、豆電球がピターンと灯る）」

女神「。+・（・・・）。+・ えつ？ 何かいい案でもつ？」

勇者「今日からミの聖剣の名前は、エクスカリバーではなく、『聖 剣 ヌ カ ミ ソ ー ド』と呼ぼう！…！」

女神「（。・。） 名前が状況にピッタリ適確になつてしまつたというだけで、問題は何一つ解決してないじやないですか

！…！」

勇者「…+。・（ \*。・。） よく伝説の剣つて斬つたら炎が出るとか、凍りつくとか、運動して魔力効果あつたりする

べ？ 斬つたら又カミソ臭がこびりつく聖剣、今、ここに誕生！  
むしろ積極的にもつとたくさんスカミソを塗つたくつとくべき…！  
(何かとっても素晴らしいことを考えついた的、誇らしげな表情)「

女神「（ 、口、：） どんだけ無駄な方向にポジティブなんですか！ 斬つた敵が又カミソ臭に悶える前に、常時持ち歩いている私たちの方が、臭気にあてられて悶絶死してしまこますよー。」

風呂場のドアがパタツと開いて、ゴンちゃんが顔を出す。

「ゴン」「おひ、どうだ？ 又カミソは落ちたか？」

女神「。。。（口、口）。。。臭いが全然落ちないんですねううーー！」こんな凄まじい臭いが染み付いた聖剣持ち歩いて、魔王ピイチヤンのところになんて行けないーーい！ーーうわーん！ーー

「ゴン」「やうじやないかと思つてよ。ほれ。」

勇者「（。・・） あ、透明なビニール袋だ。」

「ゴン」「（ハ・・・） これに入れて歩けば、とりあえず匂いは防げるだろ。」

勇者「おひ、サンキューー助かるわー。」

女神「。。。（口、口）。。。聖剣をビニール袋に入れたまま、魔王を倒しに行く勇者なんて聞いたことないいーーー！ 力ツ」「悪すきますううううーーー つわあんーーー」

勇者「ゴチャゴチャ五月蠅い女だな～。もつスカミソードになつち  
まつもんは仕方ないだろ～が～！」

女神「。。。（へへ）。。。あああああ、もつ名前がすつか  
リスカミソードで定着しちやつて～るうううう～！」

勇者「じゃあな、ロンちゃん。色々と世話になつたな。そろそろ俺  
様たち、魔王退治に出かけるわ～。」

「ロン」「お～。ま、ほどほどに頑張れよ～！」

こつして新たなる名前となつた聖剣スカミソード（ビニール袋入り）  
を携え、女神アルテシアと勇者ミナミンの伝説の旅が、よ～う・や・  
く始まつたのだつた！

果たして勇者ミナミンと女神アルテシアは魔王ピイチヤンを倒せる  
のだろうか？

つていうか、そもそもこんな調子で、魔王ピイチヤンのところまで  
辿り着けるのだろうか？

ぐうたら～一ートだつた勇者ミナミン、そもそも魔王のところに行く氣  
があるのかどうかすら怪しごや～

頑張れ、女神アルテシア！

君の苦労はまだまだ始まつたばかりだ～～

続く。

## 7話「パチンコ屋と魔王の因果関係についての考察。」

女神「さて。無事……じゃありませんけど、どうにか聖剣エクスカリバーも取り戻したことだし、魔王を倒すためには、我々の他にも仲間が必要ですよね。」

勇者「げつ、うつそー！マジで魔王討伐に行くの？俺様もつ？」

女神「（…………） 7話まできてるのに、この話の存在意義ですらある超基本初期設定にソシ「ミ入れないでもらえます……？」

勇者「え、～いや～ん。行きたくなあいいいい。俺様、おうちでネトゲしなきゃなんないしい。」

女神「ある意味、魔王討伐は人生と世界を賭けた大ゲームじゃないですか。」

勇者「チツチツチツ。わかつてないな。ゲームつていうのは、自分が傷つかないからこそやって楽しいわけよ。大きな代償を伴う戦いは楽しめないし、だつたらやる意味すらないの！おわかり？」

女神「ゲームに関してのあなたの意見はよく判りましたが、魔王討伐をやる意味がないという点に関しては賛同しかねます。別にあなたの意見は聞いてませんからつ。」

勇者「（メ　皿　）＝3　ぎやほーー！強制イベント発動とは、  
横暴ナリ　　！ー！」

女神「……で。魔王を倒すために協力してくれるような、ちゃんと

した仲間を探さなければならぬわけですが。（スルー）

女神「まあ//ナミンが聖剣を持つ剣士でしょ。私は白魔法を使えますから、後は黒魔導士や召喚士など、攻撃系魔法使いと、武闘家・騎士あたりに分類されるような体力のある方が欲しいですね。」

勇者「うむ。スロットの達人や、パチスロファイター、冬ソナ機コンプレーターなども欲しいところだな。（神妙な顔つきで検討に参加）」

女神「遊び人（ひと括り）は不要ですッ！てか、パチンコ屋に魔王はいません！－！」

勇者「（。 。 。） ば……馬鹿なッ!! 魔王ともあらう者が、  
パチン口座に通つておらぬとわ!! 童貞を死守するよりも愚かで恥  
ずべき行為じやないか!!」

女神「魔王ともあろう者がパチンコ屋通い必須つて……」ナミン、あなた、どうでもいいところで魔王の存在を買いかぶつてませんか……。ああ、もう、あなたと話をしていると、どんどん本筋から逸れていってしまうわ。とにかく仲間よ仲間！ ナミンの知り合いに、パチンコ通いをしていない、真面目な黒魔導士や騎士はいないの？」

勇者「（。A。） 黒魔導士や騎士だとかいう以前に、この俺様の知り合いで真面目なヤツなぞ一人もおらぬわ！－ましてや、パチンコ通いしてない愚か者になぞ、知り合ひつ機会があるはずがな－！－ふはははは－！」

女神「（丁寧丁） 何故、そこで威張れるのがが、さっぱり理解できません…。」

勇者「おお、そうだ！（手をぽん） パチン口屋以外で、黒魔導士や騎士をナンパできそうな場所には心当たりがあるぞ…。」

女神「（・・・・・） えつ、本当にいつ？どこですか、そこはつ！」

勇者「ズバリ、そこは『酒場』でつす…！世界の悪を倒すため仲間を求める志の高い連中が集う定番の場所、それは酒場…！もう、酒場に行くつもやない…！」

女神「（＊、＊、＊）ノ。+。＊。 まあ、人間界にはそんな便利でポジティブな集いの場があるのね？素晴らしいわ！早速そこに行きましょう！」

勇者「（＼＼＼＼＼）ノ ちよづどいい具合に、陽も暮れてきたし、腹も減つたことだしな…よつしゃ、酒場へレッツゴー…！」

かくて、勇者ミナミンと女神アルテシアは、仲間を求めて町の酒場へ行くことにしたのだった。

だが普通、酒場にいるのは黒魔導士や騎士ではなく、ただの酔っ払いだ…！

しかもどつ考えても、勇者ミナミンは飲み代を持つていないと…！ しかもどつ考えても、勇者ミナミンは飲み代を持つていないと…！ 騙されるな、女神アルテシア…！

毎回ピンチ続きまくりだ、どつなる勇者御一行様ツ…？

続  
く  
つ  
。

勇者「さあ着いたぞー！」の酒場の名前は、『つぼ丸』といつのだー。」

女神「では、このお店の中に魔王ピイチヤンと一緒に倒してくれそうな、魔法使いや剣士の方がいらっしゃるのですねー。」

勇者「。+。(・・・)。+。おーいるいる、絶対いる！太鼓判を大盤振る舞いものっかにウジャウジャたむろつてん」と、もう間違いなし！」

女神「(\*、\*、\* ) まあ。下界にはなんて頼もしい場所があるのかしり。ここで仲間を集めれば、魔王ピイチヤンを倒しに行くことができますね。さっそく中へ入りましょうー。」

♪・♪34948-4402♪

店員「ラッシュヤッセーーー3名様ですかア？」

勇者「…………ん？3名？俺様とアルテシアしかいな…………」

ミナミンが後ろを振り返ると、背後には……

勇者「（――、――、――、――） ギヤヒイイイイー！――ミイラが俺様の背中にくっついているうううう！」

女神「（。、；、。、。） キヤーーー！……つて、ひひ

と待つてください、勇者ミナミン。ミイラではあります。見た目はミイラに果てしなく近いですが、その方はきちんと生きていますよ。」

ミイラ「ふつひょつひょつひょつひょつ…ミイラとは失礼な連中じやな…」

女神「おじいさん、連れのミナミンが、失礼なことを言つてしまつて、申し訳ありません。」

勇者「（――――）いや……お前だつてしゃあ、『見た目はミイラに果てしなく近い』とか、凄い失礼な」と言つてたぞ…。」

女神「（口ホンと咳払い）で、おじいさん、どうなさつたのですか？私達に何か御用でしょつか。」

実は生きてたミイラじじこ「お主ひ、わきほど、魔王ピイチヤンを倒すとか何とかゆーとらんかったかの？」

女神「ええ。私達は魔王ピイチヤンを倒すべく、仲間を探している最中なのです。」

突然、ミイラじじこの両目から大粒の涙が、鼻からは鼻水が溢れ出した。

勇者「ギャッ。汚ねッ！（、、、）」

ミイラじじこ「（おのれと泣く）やつと…やつと、魔王を倒すところ者に出会えた…苦節30年、ここで待つていた甲斐があつた

「 というもののじや！！やはり志の高い若者は酒場に集うという、人間界の話は本当だつたのじやな！」

勇者「アホか！－志の高い若者が居酒屋なんかにいるかつ！酒場にいるのは普通、ただの酔っ払いばかりだ－！」

女神「（口）……えつ？」

勇者「え～」ほん「ほん。で、アルテシアちゃん。魔王30年放置プレイでも、世の中平和なんだから、別にあと300年ぐらいいほつ

女神」（溜息）それがねえ……神界も最初はそう思つていて、魔王ピイチャンが誕生したのは知つていたけれど、実害あるわけじゃなしってんで対策はうたなかつたんですね。それが最近になつてから、魔王ピイチャンつたら急にヤル氣を出してきたみたいで、神界に対しても挑戦状とか、テロ予告とか、卑猥な写メ画像とかを、ばんばん送りつけてくるよになつたんです。それでお父様がすっかりお怒りになつちゃつて。まあ、魔王を倒さなければならぬという根拠はそれだけではないんですが……。」

勇者「魔王ピイチヤンに何があつたんだ！つか、卑猥な写メ画像を頼んでもいなのに先方から送つてくれるだなんて、むしろいい奴のすることじやないか！喜んでもらつとけよ！俺様にも送つていただきたいわい！！！」

女神「（ \* 、 、 ） 神界はセクハラにうるさいんです。卑猥  
画像は全面禁止なのですっ！！」

勇者「（――。）」口画像全て禁止だ……と……？ありえん

！－許すまじ、神界！－俺様的に滅ぼしたいのは、むしろ神界のほうだ！－

女神「－、－、（Ｔ－Ｔ）－、－、話が途中から全部、卑猥な写メのことになつてゐんですけど……。」

ミイラじじい「アルテシア……それに神界ですと？では、あなた様はもしゃ、大神ゼース様のお子様18人の中の末娘、アルテシア様では……？」

女神「はい、その通りですが、私のことを」存知なのですか？」

勇者「（－、－、－）……ちょっと待てい。お前、今、18人兄弟だとが言わんかつたか？」

女神「ええ、そうですけど。私には兄が7人、姉が10人ありますが、それが何か？」

勇者「（－、口、－）……何か？じやねえよ！エロ画像を全て禁止しておきながら、その子沢山つぱり！お前の親父、どんだけ夜に励んだんだよ！汚ねえぞ、権力者！！もう許せん！（どつかーん！…背景で火山が噴火）俺様、魔王討伐はもうヤメる！…今、この瞬間から魔王側に加担する所存！…」

ミイラじじい「アルテシア様は噂に違わずお美しいですのう。お姉さま方もきっと皆、お美しいのでしょうか。」

勇者「（－、－、－、－）え？今、お姉さまとか言つたつ？そうかつ！すいません、嘘ですつ。俺様、さくつと魔王ピイチヤンを討伐いたします！そして熟女のお姉さま方10人に、よつてたかつ

て誉めていただきます。ぐふふふふ。（めぐるめぐる夢の妄想タイムへ突入）

女神「……（トトト）……、どうしてこんな、信念はないのに邪念はたっぷりの男が、世界を救う勇者なんでしょう…？」

ミイラじじい「おお、女神様と勇者様でしたか。素晴らしい……実は折り入つてお願いしたいことがあるのですじやー！」

どうやら勇者ミナミンはムツチリ熟女がお好みらしい。

アルテシア（清楚スレンダー系）はミナミンのストライクゾーンからはまるつきり圈外のようである。

ところで、ミイラじじいの「お願い」とは一体何なのだろう？

続くつ。

9話「マーランジのお願ひ。」

とつあえず店員の案内で、酒場の一番奥の個室に通された3人であった。

ミイラジジ、「早速ですが、勇者様、ワシの願いと云うのは……」

勇者「（○）（ピンポン 呼び鈴）注文お願いします！えっとね、俺様、まず生ビールね。あと、たちポンと、ネギトロと、鮭のハラス焼きと、鶏のからあげとお……」

女神「（…）すいません……おじいさん。この人、胃袋が満たされないと脳が働かないんですね……。」

ミイラジジ、「おつと失礼、これはワシが無粋でしたな。ここで出会えたのも、何かの縁。このお代はワシが全てもちますゆえ、お一人とも遠慮せず飲み食いしてくださいだされ。」

勇者「（皿をキラキラさせて、ジジイの手をガシッと掴む）有難う、おじいちゃん！…刺身盛り合わせもお願いしていいつ？」

女神「ミナミン…さつきから肉や魚ばかりではないですか。野菜も頼みましょう。すいませーん、この大根サラダお願ひします。」

じきに、それぞれの飲み物が運ばれてくる。

勇者「じゃ、とつあえず、俺様の今後の健闘を祈つて、カンパ－イ

」

女神「自分で自分の健闘を祈るつていう名目で、自分で乾杯の音頭をとる人を始めて見ました。」

勇者「（ビールを口に含みながら）……で？じいさん、俺様たちに頼みつて何よ？仲間にしてくれとか言つんなら、願い下げだぞ。魔王を討伐する勇者様のパーティには、ボインの女の子しか入れない決まりになつておるのだ。」

女神「（…）ちょっと…いつから、そんな決まりが出来たんですかっ！」

ミイラジジ「ふひょひょひょひょ。いやいや、この老体で長旅はもう無理ですじや。願いとこうのは全く別のもの。」

勇者「それを聞いて安心したぜ。」

ミイラジジ「そういえば、まだ自己紹介もしておりませなんだな。実はワシ、魔王ピイチヤンの守役を務めております、魔界の四大魔王伯爵の一人、ライ－」とこうものでして。」

勇者ミナミン、飲んでたビールをブーツと噴射。  
ミナミンの正面に座つていた悪魔伯爵ライ－ミ…めんどくさいな…いいや、ミイラジジで…ミイラジジはビールまみれとなつた。

女神「（……；；；；；）はいいいい？？魔界の四大  
悪魔伯爵うううう？？？」

勇者「（――、――；；；；；）おいしいいいいい！  
！めつちや敵じゃん ！！乾杯してる場合じやねえつつの！  
！俺様達、まだばりばりレベル1なのに、いきなり最強四天王の一  
人みたいな出てきちゃってんよ、しかも近所の居酒屋で！！四天  
王は四天王らしく、ラストダンジョンの通路の真ん中（一本道な  
で、回避不能）とかで、踏ん張つてるべき！……ハツ……ちよつ  
と待て、もしかしてこのジール、毒ツ？」

女神「（。。；；；；）ええええつ？私、大根サラダ、も  
うつまんじやいました 「！」

ミイラじじい「ふひょひょひょ。」安心くだされ。年老いたとはい  
え、このライーミ、四大悪魔伯爵の誇りがじぞいます。毒殺など  
とこう、姑息な真似はいたしませぬゆえ。」

女神「（\*、\*、\*）ほつ。そうですか。良かつた。」

勇者「アル、何で敵を信用してホツとしてんだ！つか、四大悪魔伯  
爵様が、レベル1の俺様たちに何のご用なわけつ？断つておくけど、  
俺様たち金も実力も、アルに至つては胸もないんだぞつ！…」

女神「（。。）私の名前はアル、テ・シ・アです！気安く、  
ショートカットしないでツ！それから、私の胸のことは放つておい  
てくださいッ！…」

ミイラじじい「金も実力もおっぱいもいりませぬ。実はワシの頼み  
とは、勇者様と女神様に書いていただきたいものがあるのでじや。」

ついに判明！！アルテシアは実は貧乳だつた！！（本筋にどうでもよさげな事項を重要視して、一番最初にもつてくる）

それはともかく、いきなり登場した魔界の四大悪魔伯爵のうちの一人、ライミ！！

彼が女神アルテシアと勇者ミナミンに書いて欲しいものとは一体ツ？次回、とっても急展開の予感！？

続く。

## 10話「神界×魔界の伝説！」

ミイラじじいはおもむろに白い紙と筆を懐から取り出し、アルテシアとミナミンの前に置いた。

ミイラじじい「女神アルテシア様と勇者ミナミン様に、すばり！ワシが書いてもらいたいのは、我が主、魔王ピイチヤンに対する、『挑戦状』ですぢやーー！」

女神「魔王宛の挑戦状というと、『今からお前を倒しに行くぞ』とか、『巨悪許すまじー』とか、そんな感じの文書のことでしょうか？」

ミイラじじい「はー。その通りでござりますぢや。」

勇者「（ ）　（ ）　（ ）　挑戦状～？　なして、そげな面倒臭いものをーー！」

ミイラじじい「その理由を話す前に確認しておきたいのですが、お二人は500年前に起こった、魔界と神界の大戦争のことを詳しくご存知ですかな？」

勇者「（ ）　（ ）　（ ）　いんや。すげえ、全く、これっぽっちも知りやしねー。」

女神「……ミナミン…。」れ、人間界では誰もが小学校で習つよな、有名な伝説のはずなんですけど…」

勇者「この俺様を見ぐらういでもらおう!! 俺様が小学校の授業で起きていたことなど、あるわけがない!! …（どーん）」

女神「見得をはらないでください。小学校だけじゃなく、中学校でも高校でも、起きてたことなんかないよ。」

勇者「（・・・・・） いきなり鋭いツツミをかましきやがったな!! フツ……成長したな、アル!! 胸以外のところが!!」

女神「（。・。） 胸のことはほつとこいつて、わざから言つてゐるよ。」

ミイラじじい「（回想モード）…………そつ……今を遡ること、500年前。先代の魔王アストロゼブブ様率いる魔界軍、ゼース王率いる神界軍が、世界の命運を賭けて激突したのじやつた……」

勇者「…\*…（ ）。…\*… あつちや～。ミイラじじい、勝手にノリノリで話しあがつたよ。しかもこれ、何かこの物語の背景（今更）に関わる的な話つぱいしい。つづわ～絶対、話長くなりそーだ～。めんどウザ～い。（おもむろにピンポーン）すつしませ～ん、焼酎と、フライドポテトと、軟骨のから揚げと、豚串追加でお願いしま～す!!」

女神「ミナミンつたら、また肉ばかり頼んで。あ、私、このイチゴクレープというものが食べてみたいです～!!」

ミイラじじい「それはそれは激しい戦いじゃつた!! 勿論、その戦いには、ワシも参加しておつたぞい!! 両雄は一步も引かず、魔王と大神の力がぶつかり合つた影響で、海はうねり、空は荒れ狂い、

火山は次々と炎を噴き上げたのぢや！戦いは100回もの間続き……（以下、ミイラじじいの大活躍物語が始まるが、長いので割愛）

勇者「（口 111）げ。アル、お前、もう甘いものいくの？目の前が甘くなつて氣色悪くなるから、頼んじや、めつ。」

女神「（トト）え、いいじゃないですか～！けち～！」

ミイラじじい「……その時、ワシは咄嗟に敵の刃を交わし、我が究極の魔術をおみまいしてやつ……（相変わらずミイラじじいの大活躍物語が続いているが、誰も聞きたくなさげなので省略）」

勇者「甘いのが欲しいなら、せめてホラ、このメニューに載つて、梅酒サワーアイスつてヤツにしろよ。こっちの方がアツサリしてそーだ。」

女神「まあ、梅酒サワーの上に、アイスクリームを乗せたオススメの一品ですつて。美味しそう～。これにしようかな～」

ミイラじじい「こうして、イチゴクレープと、梅酒サワーアイスの戦いは佳境を迎へ、梅酒サワーアイスの勝利に終わった……つて、あれ？」

勇者「お・話終わつた？あ、じいさんが話している間に、じいさんの分のつくねの追加、頼んだいたぜ。」

ワシの話を聞け「……（がっしゃ～ん！）」

女神」で、まあ、おじいさんの話を要約すると、神界と魔界の大戦が500年前にあって、必然的に二つの世界の中間に位置してい人間界が戦場になっちゃったんです。迷惑した人間は、神界側に加担することにしました。で、神界と協力して、必殺兵器・聖剣エクスカリバーを作り、人間代表の勇者は聖剣を使って魔王を倒しましたとさ。めでたしめでたしつ。」

「ミイラじじい（ノトオト）ノ……ワシの熱弁を、あつさりまとめるな……！」

勇者「チツ。結局、どうして俺様達が魔王に挑戦状をしたためなきやならんのか、全然判明しないまま、次回へ持ち越しじゃないか！…」話分、無駄にしやがって！」

「ミイラじじい（。。。）それはお前のせいじゃああああ……！」

そんなこんなで、だらりんちょの3人。

酔っ払いながら、世界の命運に関わるような、真面目な話をする方が間違っているのだつ……！

続くつ。

## 1-1話「ぐつたり魔王。」

女神「……で。おじいさん、どうして魔王さんに私たちが挑戦状を書く必要があるんでしょ？」

ミイラじじい「そのお話を前に、我が魔界の王ピイチヤンのお人柄と申しますか、悪魔柄についてご説明せねばなりません。」

勇者「ヽ(＠＠)ノ 悪魔柄ってどんな柄～？しましま柄～？ぐるぐる柄～？アハハハハ、天井がぐるぐるしてる～う。」

女神「(・・・) ミナミン、貴方、タダ酒だと思つて飲みすぎです！」

ミイラじじい「先代の魔王であるアストロゼブブ様は、持病の糖尿病が悪化してすっかり体調を崩されましてな。今から30年ほど前に、先代の魔王は一人息子であらせられたピイチヤンに、王位を譲つたのでござりまする。」

女神「まあ、糖尿病！それは大変ですね。私の父である神界の王ゼースも高血圧とメタボで、先日お医者様に食べ過ぎ飲みすぎを注意されました。」

ミイラじじい「それはそれは。神王も魔王も、寄る年波には勝てませぬの。」

勇者「ヽ(＊＊＊)ノ 糖尿病の魔王とか、メタボで高血圧の魔王とか、聞いたことねえつづーの！なんで生活習慣病丸出しなんだよーせめて韓ドラっぽく、体裁のいい白血病あたりをチヨ

イスせんかい！つか、先代の魔王つて、伝説の勇者に聖剣で斬り殺されたんじゃないの？何で糖尿病になるような齢まで、長生きしているつしゃるわけ？」

ミイラじじい「はあ。先代の魔王様は、斬られはしたもの、命には別状のない所を斬られましたのでな。」

女神「（\*、\*、\*）まあ、それはじ無事で良かつたですねえ。」

勇者「（――――）元魔王の無事を女神が喜んでどうする。アル、お前、自分が魔王を倒しに行く側の立場だつづーの、忘れてるだろ？…。」

ミイラじじい「で、ですな。話は戻りますが、このピイチャンがまた、子供の頃からヤル氣のない方でしての？…。何も悪いことをしようとしてないのですじや。毎日部屋にひき籠つては、人間界のゲームをしたり、漫画を読んだり、だらだらしているばかり。」

勇者「二ートだな！間違いない！それは二ートだな！（キラーン）」

女神「あなたのお友達ですね、ミナミン。（冷たあい田で）ミナミンを睨む）」

勇者「（、口、：）ヨタニートと俺様を一緒にするな！俺は麻雀をしてたり、パチンコをしたり、外出して金を稼いでいる！『アウトドア嗜好のブータロー』だ！」

女神「いざれにせよ、全うな社会人として成り立つておらず、親に生活全般を頼つてている点では、ピイチャンと同類ですつ。だいたい貴方のそのポジティヴな思考の根拠はどこにあるんですかつ。」

『イライラじじい』「で、見るに見かねたワシが、どうにか魔王ピイチャン様のケツを叩いて、神界に挑戦状やテロ予告などを出させて、実行させていたところなのですなのですが……」

勇者「アル、神界は何か魔王ピイチャンにテロられたわけ？」

女神「はい。神の城の外壁に『夜露死苦メカドック』と、スプレーでデカデカと落書きをされました。他にも、先ほど言いましたが、Hロード画像を写メで送りつけたりとか。」

『イライラじじい』「そのHロード画像にしても、ふんどし一丁でドヤ顔をしているピイチャン様自身のセクシーショットとか、ペットのスライムの交尾シーンとか、犬の肛門のビアップだが、しわくちゃババアの入浴シーンの隠し撮りとかばかりなのです！」

勇者「どれもこれも、手近で無料ゲットできるHロードレベルの低いものばかりではないか……！」

八・五三五一八五 — 44024

『イライラじじい』「こんなことでは、立派な悪とは言えませぬ……くうつー（思わず溢れてしまつた涙をぬぐつ）」

勇者「（じじいと一緒に涙田になりながら）くうつー、いらぬー！そんなHロード画像はいらぬううー！ーちゅーか、それHロード画像じゃないよー！ー中2男子画像だよー！ーしかもメカドックつてー！ー今更メカドックつてー！ー！ー誰も知らんぞ、『よしそくメカドック』な

「…番組…」

女神「（両手をぱたりと畳ませて）判りましたーつまり、やる気の出ない魔王ピイチヤンさんに、我々が挑戦状を出す」と云つて、ピイチヤンの闘志に火をつけ、魔王として正しいヤル氣を出してもらおうと云つことですねー」

ミイラジジ「イエッス、その通りだ」  
（万歳）

女神「やうこひ」としたら、お任せくださいー！私、子供の頃から作文は得意ですのーこれも人助け。困っている子羊を救うのは、女神としての勤めです。」

勇者「アル……お前、ひと良すぎ…。」

女神「（\*、\*、\*） ああ、そんな。書めていただく」との「とでござれこません。女神として当然のことですもの。」

勇者「いんや、これっぽちも書めちやいねえけどな。（呆）挑戦状を書いて、ピイチヤンがやる気を出すと困るのは、俺様達の方だと思つんだが…。まあ、アルがそれでいいなら、俺様的にはどうでもいいけど。」

ミイラジジ「では、書いていただけるのですなー。」

女神「勿論ですー。（ビーン）」

こうして女神アルテシアと、勇者ミナミンは、魔王ピイチャンに挑戦状をしたためることになった。

二人は一体、魔王にどんな挑戦文を叩きつけるのであろうか？

続く。

【どうでもいい注釈】

「よろし メカドック」

大昔、某海賊マークの週間少年誌に掲載されていた漫画。全12巻。大雑把な内容としては、自分で整備した車が、頑張って走っている。以上。（大雑把すぎ）

## 12話「勇者と女神の挑戦状！」

魔王のヤル気を引き出すため、挑戦状を書くことになった勇者ミナミンと、女神アルテシア。

三ノ八と女社ノリニシ

居酒屋の一室で、カリカリと一生懸命、何かを紙にしたためる一人。

勇者「（。 。 ）／ ゆっしゃアアアアアーーーでえきたアアアア

女神「。+。(。・。)。+。」  
私も出来ましたつ

ミイラジジ、「おお、有難うござります！どれどれ、まずは女神様のほうから、見せていただいてもよろしいですか？」

勇者「お、俺様にも見せろ見せろー。」

女神——(\*、\*、\* )ええ、どうぞ。

## 【女神アルテシアの挑戦状】

# 挾啓 魔王ピイチヤン様

こんにちは、突然のお手紙、失礼いたします。

私は女神アルテシアという者です。  
このたび、故あって勇者ミナミンと一緒に、魔王ペイチャンを元に

会いにゆくこととなりました。

じきにそちらにお伺いすると思ひますので、どうぞ宜しくお願ひいたします。

敬具

- - - - -

勇者「…………あのさあ…………アル…………。」

女神ー（\*^-^\*）はい、何でしょう？」

勇者「何でしょーじやねえつついのーーこれのどこが挑戦状なわけ  
つ? 拝啓で始めて、敬具でシメてんじやねえよーー丁寧すぎるて、何  
ひとつムカつくところがねえだろうがーー」

「ミイラじじい、それ以前に、女神様が魔王ピイチヤン様に会いにゆくことは判りますが、何をしにくるつもりなのかがさっぱり判りませんなあ……。」「

女神「ええっ？でも、私、魔王ピイチヤンさんは初対面ですし、ご不快にさせてはいけないかと思つて…。」

勇者「不快にさせねえでどうすんのよ！そもそも俺様たちは、魔王を倒しに行くんだぞ！！あのなあ、挑戦状つていうのは、もつとこう、相手の神経を逆撫でするようなもんじゃないとダメなの！！見る、俺様の読んだ相手がムカつきMAXになることウケアイの、華麗なるお手紙を！！」

「ミイラじじー」では、勇者様のお手紙も拝見させていただきますわ。

### 【勇者ミナミンの挑戦状】

コンニチワ。ボク、ドラ もん。

「ボちゃんの妹は、コボパパの子ではない。  
マスオの子だ。」

女神「（。 。 ； ）何ですか、これ ！ ！ ！」

ミイラじじー「（ 口 一一 ） そうだったの  
男マスオ、恐るべしちゃあああ ！ ！ ！」

勇者「フフフ。どうだ。実によくムカつく手紙だろ？！（得意げ）

女神「何を威張ってるんですかっ！確かにムカつきはしますけど、  
ムカつく以外、挑戦状として何ひとつ目的を達していないじゃない  
ですか！何故、ド えもんが、コボちゃん宅にいらぬ疑惑の火種を  
撒き散らさなければならんですかっ！そもそも『ボク、ドラえ  
ん。』とか名乗っている時点で、魔王さんに貴方からの手紙だと  
「いつ」ことが判らないでしょ？！」

ミイラじじい「何ですどう? ロボママの浮氣は捏造だつたので」  
いまするかつ? 謝れ  
!! 売新聞と「ボちゃんに謝れ  
――」

勇者「チツ。芸術を理解しない連中は、これだから困る…。」

女神「アレのビニが何が芸術だといふんですか。」

ミイラじじい「いやもひ、時間が勿体ないですから、挑戦状の文面  
はワシが考えますぢや。お一方には、ワシの書いた文章に同意の署  
名だけお願ひいたしますッ!」

勇者&女神「～（ ～ ～ ～ ～ ～ はあ～～い。」

一人の挑戦状は、ミイラじじいの手によつて、あえなくボツとなつ  
てしまつた。

ミイラじじいが書いてもいいんなら、最初つからそーしてくれれば  
いいのに。

続く。

## 1-3話「ついに宣戦布告！恐怖！魔に沈む人間界！－」

魔王に挑戦状を書くことになつた、勇者ミナミンと女神アルテシア  
だつたが、二人とも口クでもないことしか書けなかつたもんだから、  
ミイラじじいにアッサリとボツられた。  
結局、ミイラじじいが自分で魔王に挑戦状を書いて、それに二人が  
同意の署名をすることになつたのだが…。

### 【ミイラじじいの挑戦状】

正義の女神アルテシア及び勇者ミナミンは、悪の魔王ピイチヤンに  
対し、戦いを挑む決意を固めました。

近日中に、正々堂々、魔界まで魔王を倒しに行きます。

勇者「何か、スポーツ大会の開会式の選手宣誓と、借金の借用書が  
ゴチャマゼになつたような文面だな……。」

女神「ここに署名をすればよいのですね。この下の空白に名前を書  
くだけでいいのかしら。ええと……アルテシアつと。はい、ミナミ  
ンもちゃんと書いてくださいねっ。」

勇者「あいよ。ボク、ドラえも……（ガスッ。アルに殴られた音）」  
……判つたつちゅーのー！……つたく[冗談の通じね]ぶつぶつ。あい  
よつと。超絶勇者 ミナミン様見参！ーつと。  
」

女神「超絶勇者 ミナミンつて……。何かバトルスースとかに一瞬で変身できそうなネーミングですねえ。」

「ヤフジジーは、おもむろにスクツと立ち上がった。

よほよほジジイにカツ ハーいオーラ出されても、かえってムカつく。

ミイラじじい「実はこの魔界の四大悪魔伯爵こと、このライーミ、女神様と勇者様にお見せしている今現在の姿は、人間界用の仮の姿でしてな。眞の姿をお一方に見せておかねば、礼儀を欠いてしまいます。」

勇者「（……）ナヌツ？もしかして俺様をしおいて、ジジイの変身予告つ？超絶悪魔ミイリジい誕生伝説をぶちあげる気かツ？（嫉妬）」

女神「（人、 、 ） 、 。 。 。 \* 。 まあ、 本当はどんなお姿なのですか？ わくわく。」

「マジマジ、「眞の姿をお見せすがる前の前」。ワシ、ちよつとおこひに行つておきますじゃ~。」

勇者「は？待たせてんじゃねえよ、先に変身してからにしのよー」

勇者「判つた判つた！！大でも小でもいいから、とつとと行つてこ  
いつ！」

マジック、それをと西酒屋の廻転からはじめる。

數分後。

居酒屋個室のフスマがスパーント勢い良く開いた！！

いかにも悪魔貴族っぽい、豪華ズルズル極彩色キラキラ衣装を着て、  
ドヤ顔をしたミイラじじいが立っているではないか！！！

女神「……（〃〃）……まあ、『立派なお姿に

勇者「（メノ、皿、）…… ちょっと待たんか  
……どどーんじゃねえつつの……アルも感動してんじゃねえよ  
……着替えてきたよねッ？ 今、明らかにトイレで着替えてきたよね  
ッ？ つーか、コスプレしてただけで、中身はミイラじじいのまま  
だよねッ？ 何ひとつ変身っぽいもの、してないよねッ？」

「いらじじこ、そんなことはないぞよ、勇者様。ほれ、これを見なされー。」

「いらじじこは勇者たちに向かって、くるりと背を向けた。じじこのお尻のあたりに、いかにも悪魔っぽい、黒く細長いしっぽがフランフランと揺れていた。

「いらじじこ、『見るださー』のつまんが、悪魔の証なのでじじりますー。」

勇者「ビ  
でもいーわ！！そんな証！！お  
い、アル。このつまんを斬つていーか？ちょうど俺様、聖剣ヌカミン  
ード（ビール袋入り）も持つてゐし。」

女神「（ 、 口、 ） ヌカミンジヤありませんたりー。  
その剣の名前はエクスカリバーですー。」

「いらじじこ、ぬつ？ひらが礼をぬくして謙虚に接待しておると  
この辺、勇者のこの態度は何たることぢやー。このトライー！」怒り  
ましたぞー。」

怒り心頭の「いらじじこは、ズルズル衣装の懷から水晶玉を取り出  
すと、パカーンと床に呑き付けた！  
粉々に碎け散る水晶玉！

勇者「ぎやわつ！ 破片が飛んできたつ、危ねつ！……ん？ 水晶玉の破片から、どよ～んとした黒い怨氣みたいなのが出てきて、広がつていつたぞ…？」

女神「（ 口 一一一） ま……まさか、今の水晶玉は……」

勇者「え？ 何？ 何？ ガラス爆弾攻撃とかじやなかつたのつ？」

女神「今の水晶玉はおそらく『魔界の悪魔・詰め合わせセツト玉（黒）』ですっ！叩き割ると、その周辺地域に大量の低級悪魔が出てきてしまうのですっ！」

ミイラじじい「女神様はお察しが早いーその通りぢやーーふつひよ  
つひよつひよつひよつひよつひよつひよつひよつひよつひよつひよ

ついに真の姿となり、悪魔の本性を剥き出しにしてきた、魔界の四大悪魔伯爵ライミー!!

11

どうやら本当に世界のピンチに突入つぽいぞ！！

どうする勇者!! ナミン&女神アルテシア!!

世界が破滅したら、明らかにあんたたちの責任だッ！！

続  
く  
つ  
。

14話「勇者、生まれてはじめて凜々しく戦ひシ。」

さつきまで仲良く酒を飲んでいたはずだったのだが、突然何かのスイッチが入つたらしく、勇者ミナミンと女神アルテシアに魔物の牙を剥いた、魔界の四大悪魔伯爵ライミーとミイラじじい！！

じじいの放つた『魔界の悪魔・詰め合わせセツト玉（黒）』のせい

で、人間界に魔界の悪魔が溢れてしまふことになってしまった！

「マジンガー」（メ　目）= 3 勇者め、酒をおひこやつた恩  
も忘れて、よくやつしの悪魔のしつぽを聖剣で斬りおとせりと  
つたな……。」

勇者「（\*、\*、\*）」、「シ やかましいわい！――」  
やがつて、田障りなんじや、そのしつぽ――！」

女神「ちょつとひょうひと!!ナ!!ン!!-」（女神、勇者を部屋の隅に引きずつてこき、耳つぶす。）

勇者「何じゃい！！アル！邪魔すんな！！」

女神「ミナミン、あの悪魔のしほは、本当に魔族にとつての誇りなんですつてば！神族における天使の羽ぐらいの価値があるものなんですよっ！」

勇者「（・・・）！！え、？そーゆーモンなの？つまり悪魔のしつぽって、男におけるタマタマ様ぐらこの価値があるってこと

?

女神「（、×、・） 私は女だから、タマタマ様の価値は判りません。ミナミン、下ネタ多すぎつ。」

勇者「いいが、タマタマというものはだな、タマタマというものはだなア～！！」

女神「うるさい、酔っ払ってるでしょーで、話を元に戻しますけど、しつぽは斬りおとされてしまうと、その悪魔は魔力を失ってしまいます。勿論、魔力の源であるしつぽは、そう簡単に斬りおとすことはできません。」

勇者「タマタマだって切り落とすと生殖能力が……」

女神「（無視）そこで作られたのが、聖剣エクスカリバーです。エクスカリバーは悪魔のしつぽを斬りおとすために必要な、聖なる力を持つた魔法剣なのです。500年前に起こった神界と魔界の大戦争の時も、当時の魔王アストロゼブブ王のしつぽを、あなたのご先祖である勇者が、聖剣エクスカリバーを使って斬りおとしました。それで魔王アストロゼブブは力を失い、神界と人間界が勝利することができたのです。」

勇者「ああ、なるほど。先代魔王が聖剣で斬られたのに、どうして糖尿病患うまで長生きしてんのか不思議に思ってたんだけど、しつぽを斬り落とすところまでで止めてたつてわけね。」

女神「そういうこと。今、突然ミイラじじいさんが怒り出したのも、あなたが聖剣で彼のしつぽを斬りおとしてやるなどと、言い出したからなのですよ～ミイラじじいさんに失礼じゃないですか。きちんと謝りなさい～～！」

勇者「（ 、 、 # ） フッ。やな」つた…」

女神「えつ？」

勇者はスクッと立ち上がると、ミイラじじいの方に向き直り、カツ「良ぐビシイッ 人差し指をつきつける…

勇者「だいたいなあ！ 勇者と女神が、敵である悪魔と仲良く酒飲んでる状況からしておかしいんだつーのー このミイラじじいさえ倒しどけば、世の中平和になるつてことだらうが！ 魔王ピイチヤンは無能でヤル気がないんだから、放置プレイにしておいても別に構わんといつことだ…！」

女神「ああ、そつか、言われてみればそつですよな。（手をぽん）」

ミイラじじい「ぬぬう！…バレてしまつたか…！…流石は勇者と女神……（油汗ダラダラ）」

勇者「相手はヨボヨボのミイラじじい一人、しかも弱点が判りきついていて、最強の武器も我が手にあるツー確実に勝てる状況の戦いであれば、俺様は最高に強いゼツ…！（瞳がキラリーンと光る）」

女神「（ 、 、 ） ハ いやまあ、誰でも普通はそつでしうね。威張りながら宣言することではないと思いますが…。というか、そこまで恵まれた状況じやないと戦わないんですね、ミナミン……。

勇者「ふはははは……へりべ、ミイラじじい……正義の怒りをな

」

アアアアアー！！！

「

早速勇者は手に持っていた、聖剣エクスカリバーを透明なビニールから取り出したのであつた！！！

あのダメ勇者ミナミンが初のヤル気まんまん、マトモにカッコよさげ！？

むしろ何だかヤな予感！！

続くつ。

## 1-5話「惨劇…つぼ九密室テロ事件…」

世界の平和を取り戻すため、やつぱり悪魔伯爵であるミイラジジーを倒すことにした、勇者ミナミンと女神アルテシア！

勇者ミナミンは、悪魔の力の源であるしつぽを斬りおとす「」ことが出来るという聖剣エクスカリバーを、透明なビニール袋から取り出し、天高く掲げる…！

勇者「聖剣！…！…ヌカミソオ ドツツツツツツ…！…！…！  
ドツギヤアアアアン…！…！…効果音&背景指定・稻妻ベタフラッシュ」

女神「（。 。 ） こやだから、ヌカミソードじやなくて、H  
クスカリバーですってばツツツ…！」

勇者ミナミンがヌカミソ瀆けエクスカリバーを構えたその時であった…！…！…  
周囲に異変が起きたのである…！…！…

… + 。 。 + . 。 . \* . 。 . \* . 。 . \* . 。 . \* .  
。 . ( . 。 . ) . . \* : . 。 . \* . 。 . \* : .  
. . + 。 . 。 + . 。 . \* .  
: . 。 . . + 。 . 。 + . 。 . \* .  
: . 。 . . + 。 . 。 + . 。 . \* .

ミーラジジ、「ぐはああああああッ・何じゃ、」の又カミソが超発  
酵した挙句に、ほどよく腐つたような匂いわッ・・・（鼻押さえなが  
り、悶絶して転げまわる）

勇者「想像以上にキタ 。 。 \* 。 。 ( ) 。 。 \* : . . .  
！！！ 強烈強烈強烈ううううう～ツツツツ～！～！俺様、イケナ  
イ封印を解いてしまつたアアアアアア～！～！～（鼻を押さえながら、  
以下同文）」

ミイラじじい「おのれ、勇者&女神！魔界の襲撃に備え、聖剣工クスカリバーを強化しておつたのじやなー！」

勇者「ハツハツハツハ、その通りだ！！おそれいつたかっ！！（大威張り）」

女神「『勇者&女神』だなんて、お笑い芸人のユーチューバーみたいな括り方しないでくださいッ！ミナミンも嘘つかないのっ！」

勇者「とかツツ」「//」入れてる場合じやねえつつのー、マジ死ぬーーこのままでは俺様が死ぬうううーー！しかもこの居酒屋個室つて、バツチリ密室じやねえか！換気換気ツー！」

勇者!!!ナミンは、必死で手を伸ばし、居酒屋個室のフスマを開けようとした、その時である！

つぼ丸の店員「お巡りさん、」の部屋ですっ一言こ争う声がしたの  
は……「ハハハー。」

警官「ぐはっ！ 何だ、」の異臭わッ！ まさか、テロッ？」

女神「へへ（トト）へへ  
すううううーー！」  
はわわわわ。ち……違つんで

店員「ああっ！見てください、お巡りさん！刃物持つてる人がいますよー！間違いありません、こいつらテロリストですっ！」

勇者「ヽ( #。。 )ノ 誰がテロリストだッ！ 俺様たち、世界を守る勇者＆女神だつづーの！」

警官「しかも何だ、このじいさんと女性の「スパイ」のようなカツコ  
わ！ とりあえず全員、署まで来てもらおうつ！ （3人全員に手錠を  
かける）」

「アーニング」（ト目ト） は おおむねおおむね。 く……く……く……く

女神「（ ） 聞いてください、お巡りさんんんんー！本物に違  
うんですつたらあああああ。」

警官「はいはい判つた判つた。ヨツパライはみんなそいつなんだよ  
ネー。話なら署で聞くからつ。」

店員「あ、先にご会計を願います。全部で二千四百円になります。」

勇者「（ハ・・・）あ・お金せんのマイジジが払つか  
ら、ねんぱくネツ」

ミイラじじい 「。。。。。ギーヤアアアアア-----踏  
んだり蹴つたり  
----- (悶絶叫) 「

真面目に世界の命運を賭けた戦いが始まるかと思いきや、アッサリと警察にしょっぴかれてしまつた3人なのであつた!!

居酒屋で黒鳩湯ノ丸物を握り回して暴れています

次回、新たなる展開の予感！！  
その前に、勇者＆女神は警察から出てこられるのかつ？

続くつ。

## 16話「最大最強の敵、現る！－！」

世界の命運を賭け、居酒屋つぼ九で悪魔伯爵ミイラジーと戦おうとした勇者ミナミンと女神アルテシアだったのだが、店員に警察に通報されてしまい、酔っ払って暴れたバカとして全員逮捕されてしまつた！

警察の留置場に、まとめて放り込まれてしまつた3人だつたのだが……。

勇者「ンガ～スピヨ ルヨ ルヨ ルヨ……」

女神「ミナミン一。おまつとミナミンつむばー。もつ朝ですよー。起きて  
くだせー。」

勇者「ぐぐぐぐぐ。もつ食べりれなーい。シノリちゃんも、酔っ払いさんも、こんな俺のものだよ~。」

女神「（、×、・） まだ淫夢ですか！第一話と全く同じ展開じゃないですか！－ええい、もう起きなさい」というにて！

留置場のベッドから転げ落ちた勇者「ムガ？あれ、アルじゃねえか。

てか、『『『』』』何で俺様たち、牢屋に入つてんの？（キヨロキヨロ）

女神「ここの警察の留置場ですよ！昨日、私たち、警察に捕まつてしまつたでしょ！」

勇者「（　　）ええええつ？何でつ？」

女神「（　　）昨日の出来事を、全く覚えてないんですか？」

勇者「えーと、たしかミイラじじいとビール飲んで、焼酎飲んで、日本酒飲んで、ウイスキー飲んで。おつ、思い出した思い出したつ！俺様、その後、ムカついたからミイラじじいを倒そうとしたんだけど、警察に邪魔されたんだつた！」

女神「（　　）世界を救うためではなく、ムカついたからミイラじじいを倒すつもりだつたんですね。いや、判つてはいましたが…。」

勇者「あれ？そ、いえば、ミイラじじいがいないぞ！奴はどうした？おのれ、一人だけ脱出しあがつたのかつ？（嫉妬）」

女神「ミイラじじいさんは、夜中にゲロゲロ吐きだして、救急車で病院の方へ搬送されてしまつましたよ。みんな大騒ぎになつてたのに、ミナミンつたら、ぐつすり眠りこんで全然起きないんですもの。」

勇者「あの程度の酒で簡単に急性アルコール中毒つてかよ！つかさー、先代魔王は糖尿病らしいし、現魔王のピイチャンだつて二一

トでぐうたらだつゝ話だし、もしかして悪魔連中つて普通に弱くね？この俺様が、わざわざ討伐に出かけなくても、近所の血の氣の余つてそゝなヤンキー少年を10人ぐらい集めて攻め込めば、魔界制圧できそうな氣がしてたまらないんだが。」

女神「……（トトト）……近所のヤンキー少年軍団に救われるような世界つていいたい……！」

勇者「なにおう！ヤンキー少年10人を侮つてはいかん！！奴らは若い分だけ命知らずなのだ！装備も充実している！武器・角材・野球のボール・釘バット等、防具：お父さん（建築作業員）のヘルメット・じいちゃん（農家）の農作業用ゴム長靴・盾は台所からチヨツぱねてきた鍋のフタ！！これが10人もいるんだぞ！！おまけに全員、田つきが悪くマコゲもないのだ！うを～何て強そうな集団なんだらうつ！！！これで世界は安泰だあああ！！（両手の拳を、天に突き上げて叫ぶ。）

女神「……もう、あなたの妄想暴走には、どこからつっこめばいいのか判りません……。酒は抜けてるはずなのに、よくそんなこと思いつけますね……。（滝涙）」

勇者「おう。ついでに今氣付いたんだが、俺様のヌカミソードがないではないか！」

女神「ついでつて！一番大事なことでしょつ！聖剣工・ク・ス・カ・リ・バアア～～～（名前を強調）は、刃物厳禁ということで、警察に没収されてしまいましたよ。はづはづづ。事情を説明して、返していただかなくては……。」

勇者「何より、ここから出ないことにま、魔王討伐も何もあつ

たもんじゃね～な。さて、どうしたもんだか……」

その時である！

鉄格子前の廊下奥側から、ズシーン……ズシーン……という、重低音が響いてきた。

その畠は、だんだんとひびきはじめてくるようだが……？

女神「何かしら？誰かの足音のようですが…。」

勇者「（……；；；；；；） し……しまつたあアアアアア！  
！奴がつ！奴がつたああああつーー（青ざめながら、超  
ガクブル）」

女神「え？ 誰？ お知り合いの方ですか？」

勇者「奴は俺様の、最大最強の敵だつ！！！」

女神「ええつ？最大最強の敵つ？」

勇者「…………。」  
「うきやああああーー牢屋内にいたの  
では逃げ切れんーー！」

あの凶太い神経の勇者ミナミンをここまで怯えさせる、最強最大の

敵とは一体誰なのかつ？

ミイラじじいの病状はつ？

聖剣エクスカリバーの行方はつ？

勇者＆女神は留置場から出られるのかつ？

様々な謎を残しつつ、物語は新たなる局面へ突入するッ！！

続くつ。

## 17話「勇者、戦闘不能！！」

留置場の鉄格子の中に、朝の平和（？）なひとときを味わつてい  
た勇者＆女神だつたのだが、それを打ち崩すかのように、廊下の奥  
からこちらへと近づいてくる怪音！！

ズシーン…………ズシーン…………

勇者「（――、――・・・） ギヤアアアアア――！  
間違いねえええ――！――奴の足音じゃあああああ――！――奴が――！奴  
が近づいてくるうううう――！俺様、殺されるううう――！――（往生際  
悪く留置場の天窓にモガモガとよじ登つて、逃げようと試みては、  
失敗してずり落ちる。）」

女神「（・・・）ええっ？ 何をそんなに怯えているんですか、ミナミン。」

ズシーン…………ズシーン…………

ズ・シーン。

鈍く響き渡つていた足音は、勇者＆女神の牢屋のちょいびまん前で止まる。

鉄格子の向いに立つて、まるでヨーロッパのよきなエプロン姿の田漢

が、額に青筋を10個ぐらい浮かべて、すんごい形相でミナミンを見下ろしていた！！！！

勇者（口一一）わーやああああああ……か……母ち  
やんんんんんんんん……」

女神「（――）。（）えええええつ～ミナミンの恐れていた最強の敵つて、ミナミンのお母様つ？」

母親「身元引受人になつてくれつて、朝、警察からうちに電話が来た時、あたしや恥ずかしくて口から火を吹くところだつたよ！」

勇者「恥ずかしくて顔から火が噴き出そうだったつてんなら判るけど、口から火を吹くのは変だろつ！！キングギドラかよ！！」

母親「人の言葉尻つかまえて、ツツコミ入れられる立場だと思つてんのかいいいい！！！！（怒りのあまり両目がギラッチャリーンと光りだし、地獄の閻魔の如く、口から炎がベロベロと吹き出でくる。）」

勇者「比喩じやなくて、本当に火を吹いてやがるよーー！キングギドラそのものだよーー！それでも人間かーーー！（涙目になりながら、母親がヒト科のホモサピエンスであることに對して猛抗議。）」

母親「問・答・無・用　　――そこになおれええい、ミナミン　　――！」

ミナミンの母ちゃんは、ポパイのような豪腕を鉄格子にかけると、フンヌツとじつ掛け声とともに、左右に叩く。鋼鉄で出来ていたはずの棒は、まるで飴細工のよじてぐるにゅつといともあつたりひん曲がつてしまつ！　ミナミンの母ちゃん、恐るべし――！――！

母親「くらえ！　息子矯正拳！（要するに息子におしおきするためだけに、自力で適当に拳法を開発。）超必殺奥義！――！　絶・天狼　無双飛翔薔薇醤油転生憂鬱昇龍霸アアアアアアア　――！」

やたら画数が多くて読む氣の失せるよつた漢字ばかりの必殺技名を叫ぶと、母ちゃんは拳をくりだした！――！

衝撃波が留置場のコンクリートの床を爆音と共に破壊しながら突き進み、ミナミンを直撃！――！

ミナミンは見事に壁にめりこみ、一撃でH.P.が0となつて戦闘不能と化した！――！

女神アルテシアは、掃除機が怖くて部屋の隅っこまで追い詰められてしまつた子猫ちゃんのようにプルプルと震え、硬直したままだ。

そこに、激しい轟音に驚いた警察官が、様子を見にすつ飛んできた。

警官「ちよつと…じうしたんですか……ひひひ？　何だ、この手榴弾が10発ぐらい炸裂したような有様わつ？　もしかしてテロッ？」

母親「ああ、おまわりさん。すいません、わたくしの息子が『迷惑をかけいたしました』。（深々と頭を下げる）」

警官「いや……あの……息子さんはたいした迷惑ではないんですが、それよりも、この留置場の有様は一体……。」

母親「ああ、これですか？タオヤメ（漢字では『手弱女』と讀く。）の私がちよつぱり手をかけただけで、こんなふうになってしまつたんです。建物や鉄格子が、老朽化していたんじゃないでしょうか？（いけしゃあしゃあ）」

警官「あ…………そ…………そ…………うなんですか…………。お…………教えてください、感謝いたしました…………。（怖いので反論できない）」

母親「いえいえ、警察に協力するのは、善良なる市民の努めですか。それでは、これにて失礼いたします。息子を連れて帰りますので、息子が持っていたはずの剣も返してください。」

警官「いえ……あれは凶器にあたりますから、お返しあるわけには……」

……

母親「返していただけるんですか。あつ・よつ・ねつ?（母ちゃんの背後のオーラが『ガガガガガ』とこつ音と共に、仁王の姿をかたどつてゆく。）」

警官「あ……ハイ……勿論ですとも。お、お返しありますですツー!（敬礼）」

母親「やーー。話も済んだといひで、ホーリ、やつやと睡るよー。」ナ  
ミー（壁に埋もたまおの）ナミーをベベグリだし、首ねっこを  
持つてひしゃがつてゐる。）せり、お隣のおじゅうひやさんも、一緒に  
おこで。」

「ナミンの母ちゃんの功績（？）により、無事……いや……全然無事じゃないか……どうにかこうにか牢屋を脱出した、勇者ミナミンと女神アルテシア。母ちゃんが無理強いした警察の『好意』により、聖剣エクスカリバーも返却してもらえて、一件落着

留置場を脱出した後、新たなる一人の旅は始まる……のか？  
そもそもミナミンは生きているのか？  
ある意味、魔王にやられるとかよりも、勇者＆女神は大ピンチのよ  
うな気がするぞ！

続  
く  
つ  
。

「お話を聞かなければいけない。お話を聞かなければいけない。」

ミナミンの母ちゃん（似てる有名人・山のフデウ）の脅迫……いやなかつた、協力により、無事留置場を脱出し、聖剣スカミソード……いやなかつた、エクスカリバーも取り戻せた、勇者ミナミンと女神アルテシア。

彼らの次なる旅の目的地はどこだ？

それはさておき、勇者ミナミンは母ちゃんの息子矯正必殺拳の超大技をくらい、気絶中である。

母ちゃんは軽々とミナミンを肩にかつぎ、悠然と街をゆくのだった。その後ろを、チョコチョコと小走りで、女神アルテシアが続く。

母親「いや～、今日もいい天気だねえ。街のみんなも親切に、か弱い私が息子をかついでいるのに気をつかって、道をあけてくれているよ。」

女神「……（トト）……はううう。て、いうか、なんとなくみんな怖がつて田を逸らして避けているような。モーゼになつた気分ですう。」

母親「とにかく、アルテシアちゃんだけ？うちのバカ息子がすっかりお世話になつちゃつたみたいだねえ。」

女神「いえいえ、とんでもありません！ミナミンには、いらっしゃるお世話になつております。魔王を倒し、世界を平和に導くために、協力してもらつておりますので。」

母親「へえ、この子がそんな立派なことを…。ミナミンは一体、あんたに何の協力をしたんだい？」

女神「ええと……。とりあえず初日の昨日は、ミナミンが失くした聖剣エクスカリバーと一緒に探して、それから見つけたエクスカリバーはすでにヌカミソ漬けになつてたので一緒に洗つて、魔界の四大公爵であるミイラジジイさんと三人で飲み会をやつて、で、最後には乱闘騒ぎとなつまして、全員仲良く警察にしょっぴかれました……。」

母親「（溜息）協力はしているけど、役にはたつてないみたいだね…。」

女神「はい……。今、昨日の出来事を口に出してみて、お母様とまつたく同じツッコミで、最後を締めよつとしていました…。ううつ。（涙目でうなだれ）」

母親「（…）すまないねえ。ホント、うちの息子ときたら、出来が悪くつて。へタなところなんか、父ちゃんにそつくりですか。」

女神「やつこえば、ミナミンのお父様はどうなさつてこるのですか？」

母親「ああ、今、まんじゅう屋の店番やつてるよ。」

女神「あら、ミナミンの」実家はまんじゅう屋さんなんですね。」

母親「勇者の家系がまんじゅう屋つていうのも変な話なんだけどさ。でも勇者だけでは平時に食べていけないからね。」

女神「（＊、＊、＊） いいえ、立派なお仕事だと思います！私、おまんじゅう大好きです！」

母親「そうかいそうかい。（上機嫌）あんた、いい娘だねえ。今度、うちに来た時にたらふく食べさせてあげるよ。」

女神「。 。 + : バ（＊ - - ）シ . . + 。 ほんとですかつ？」

母親「一番人気は、『勇者まんじゅう』や！伝説の勇者の血筋をひいた父ちゃんが作る、勇者まんじゅうっていう触れ込みなんだ。」

女神「（＊、＊、＊） まあ、抜け目なく、勇者家系であることをおおいに利用されているのですね。お見事ですわ。」

母親「本当はまんじゅう焼いてるのが私で、店番はうちの人なんだけどね。ほんっと、うちの人ときたらミナミンと一緒にヘタレなもんだから、満足にまんじゅうひとつ焼けやしない！ところで見たところ、さつき魔界の誰かと、三人で飲んだって言つてなかつたかい？警察にはあんたたち2人しかいなかつたみたいだけど？」

女神「あ、ミイラじじいさんは留置場に入った後、急性アルコール中毒になつて救急車で病院へ運ばれてしまつたのです。」

母親「（・・・・・） 何だつて？ そいつはいけない！ お見舞いに行つて、母親としてうちの息子の非礼を詫びないと…」

女神「（・・・・） はつ。 うううよねつ。 私もミイラじじいさんに、謝りたいですつー！」

母親「多分、警察署から一番近い総合病院に運ばれたのだろうから、そこに行つてみようか。けど、手ぶらってのも何だね。うちのまんじゅうでも持つていってあげよつか。」

女神「それは素晴らしい考えです！勇者まんじゅうなんて、きっと魔界では手に入らないだろうから、ミライラジジさんもきっと喜んでくださりますわ！」

思わずぼそりと呟く勇者「…………何で魔界の四大伯爵に見舞いに行つた拳句、よりにもよって『勇者まんじゅう』持つてくんだよ、お前らオカシイっつーの…………つーか意気投合してんじやねえよ……。」

母親「…………ん？アルテシアちゃん、今、何か言つたかい？」

女神「いいえ、私は何も。（ふるふると首を横に振る）」

母親「おかしいねえ。確かに何か、聞こえた気がしたんだけど。」

女神「ミナミンも相変わらず、ぐつたり気絶したまんまでしねえ。」

「

母親「お、公園があるね。ミナミンを担いだままじゃ重たいから、私だけ、ひとつ走り店に戻つて、まんじゅうを取つてくるよ。アルテシアちゃん、ミナミンとエクスカリバーを公園においてゆくから、ちょっと見てもらえるかい？」

女神「(\*^\_^\*)」はいっ。わかりましたあ。」

母親「アルテシアちゃんの分の、まんじゅうも持つてきてあげるか

「ねら  
！」

女神「ヽ(^\u2033^\u2033)ノ わあ、ホントですかっ？ わざわざ有難う！」  
ざこざこますつー！」

母ちゃんは、肩に担いでいたミナミンを公園のベンチの上に降ろすと、凄い振動と爆煙をあげながら、自宅に向かって走り出したのであつた。

その後の姿は、まるで怒りに我を忘れて突撃する、王蟲のようであつたといつ……。

女神「（ 口 一一一）えええええ？ 起きてたんですか、  
ミナミン？ ！ 逃げるつてビックー？ つていうか、私のおま  
んじゅうはああああああああああああああ？」

母ちゃんの隙をついて、脱出に成功した勇者ミナミン！  
だがしかし、一体どこへ逃げるつもりなのであらうかつ?  
母の魔の手は、世界の裏側まで追いかけてくるに違いない！！  
どうする、ミナミン！逃げ切れるのか、ミナミン！  
そして女神アルテシアは『勇者まんじゅう』を食べられるのかつ？

続  
く  
つ  
。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3456y/>

---

ふあいなるクエスト！

2011年11月26日21時00分発行